



JIC インフォメーション

第 176 号 2013 年 07 月 10 日

年 4 回 1・4・7・11 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町 2-13 ワキタ天満橋ビル 812 号 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジエーニャ



ロシア・旧ソ連
国際交流誌

夏こそロシア！ 旅行の季節到来



旅行・留学のお問い合わせはいつでもお気軽にJICへどうぞ！
<http://www.jic-web.co.jp>

— ロシアの古都、スモレンスクのクレムリン —

ロシア文化フェスティバル 2013 オープニング・・・2P
大阪ロシア領事館で豊中市民交流会・・・3P
ウラジオストクの旅 (大阪日口協会)・・・4P
ジーマの「まちを歩けば」・・・5-7P
クナイパへようこそ！
スモレンスクのフォークフェスティバル、他

＜連載＞キーロフ十字架行進(4)・・・8-11P
ベリカロツコエ村の 1 日 伏田昌義

本の紹介「プーチンの思考」・・・12P
「ウラジーミル・プーチン」

＜連載＞エクメネの最果てへーサハ共和国ー

岡本健裕・・・14-16P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

ロシア文化フェスティバル 2013

帝国ホテルで華やかにオープニング

7 年間の累計入場者が 1000 万人を突破！

6 月 3 日、東京・帝国ホテルにて、ロシア文化フェスティバル 2013 in JAPAN オープニングセレモニーがロシア政府代表を迎えて開かれました。セレモニーには日ロあわせて約 500 名が参加。ロシア側からミハイル・シュビトコイ大統領文化特別代理がプーチン大統領のメッセージを読み上げ、日本側からも城内実外務政務官が安倍晋三首相のメッセージを代読するなど、これまでにない盛大なオープニングとなりました。

パーティでは、ロシアオペラ界のスターであり、同時に国会議員、テレビ司会者としても活躍するマリヤ・マクサコワさんが、ビゼー作曲『カルメン』など 4 曲を熱唱。また、今回のオープニングで 1000 万人目の入場者となった福田知代さん(高校教師)に、モスクワ・ペテルブルグ旅行がプレゼントされました。

2006 年に開始された文化フェスティバルは今年で 8 回目を迎えます。この間、音楽、バレエ、民族舞踊、映画、美術、民族工芸など、さまざまなジャンルの催し物が各地で開かれ、ロシアの豊かな文化・芸術を幅広く紹介してきました。JIC もこの文化フェスティバルの賛同者として協力し、秋のロシア・セミナーなどを開催してきました。ロシア文化フェスティバルを通じて、日本人とロシア人がお互いに関心を持ち、理解を広げていくことが期待されます。

今年のロシア文化フェスティバルの企画は以下のとおりです。

* * *

<ロシア文化フェスティバル 7 月以降の予定>

● チェブラーシカとロシア・アニメーションの作家たち展

7 月 12 日～9 月 1 日 八王子夢美術館

11 月 16 日～14 年 1 月 15 日 兵庫県円山川公苑美術館

● プーシキン美術館展「フランス絵画 300 年」

7 月 6 日～9 月 16 日 横浜美術館

9 月 28 日～12 月 8 日 神戸市立博物館

● ボリショイサーカス

7 月 13 日～15 日 沼津・キラメッセぬまづ

7 月 20 日～28 日 東京体育館

7 月 31 日～8 月 6 日 横浜文化体育館

8 月 9 日～12 日 大阪・ボディメーカーコロシアム



東京・帝国ホテルで開かれたオープニング・パーティ

8 月 15 日～19 日 千葉・幕張メッセ

8 月 22 日～26 日 名古屋・愛知県体育館

8 月 29 日～9 月 1 日 京都府立体育館

● ロシア・ソビエト映画祭 2013

9 月 15 日「貴族の巣」「チャイコフスキー」

9 月 16 日「スタニスラフスキー・システム」

会場:東京・浜離宮朝日ホール

● ボリショイ劇場ソリスト・アンドレイ イコフ 魅惑のトランペットコンサート

9 月 25 日 東京・豊島公会堂

9 月 26 日 千葉・京葉銀行文化プラザ

9 月 27 日 横浜・関内ホール

● ユートピアを求めて～ポスターに見るソヴィエト・モダニズム

10 月 26 日～14 年 1 月 26 日

神奈川県立近代美術館 葉山

● 「ロシアの真珠」バシキール民族ダンス

10 月 10 日 武蔵野

10 月 11 日 水戸

10 月 12 日 千葉

10 月 13 日 東京・豊島公会堂

● ロシア・ナショナル・バレエ「白鳥の湖」

10 月 17 日 神奈川・秦野市文化会館

10 月 18 日 千葉・四街道市文化センター

10 月 20 日 埼玉・東松山市民文化センター

● ロシア児童舞踊アンサンブル「カリンカ」

11 月来日公演

● ロシア国立モスクワ・クラシック・バレエ

「白鳥の湖」「くるみ割り人形」

12 月初旬来日公演

※詳しくは、日本組織委会のサイトをご覧ください。

⇒ <http://www.russian-festival.net/festival.html>

大阪ロシア領事館で 初の豊中市民交流会

4 月 27 日、在大阪ロシア領事館にて「とよなかロマンチック街道そぞろ歩き、いちばん近いロシアを訪ねて」と題して、市民交流会が開かれました。1970 年代の半ばに在大阪ロシア領事館(当時はソ連領事館)が豊中市に開設されてから 36 年以上たちますが、実は豊中市民との交流会は今回が初めて。「せっかく豊中に領事館があって、いちばん身近



な外国があるのに、市民との交流会がないなんてもったいない！」と発奮した山内富美子さん(モディス・ムジカインターナショナル、豊中市在住)の発案で、豊中市や大阪音楽大学同窓会、学校法人梅花学園などが後援して、約 170 名の市民が集う交流会がにぎやかに開催されました。

当日は、豊中在住の女優・雪代敬子さんが「さくらの舞い」を披露し、浅利敬一郎・豊中市長が挨拶、ラチャーポフ総領事が、領事館の全スタッフを紹介したあと、「ロシアってどんな国？」と題して、JIC の伏田と総領事が対談形式でロシアについて語り合いました。さらに、山内美奈さん(ピアノ)と仁科人美さん(バイオリン)のコンサート、領事館スタッフ手作りのロシア料理、梅花学園の生徒さんによるハンドベルの演奏、ロシア民族楽器バラライカ演奏と、盛りだくさんのプログラムが続きました。



また、総領事夫人・マリーナさんが和服姿で登場、会場に花を添えました。

来賓では、豊中市で幼少期から 20 年近くを過ごした漫画家・手塚治虫氏の長女・手塚るみ子さんが来られ、日本の



梅花学園生徒さんたちによるハンドベルの演奏

アニメがロシア(ソ連)のアニメーションの影響を受けて発展したエピソードなども話されました。豊中市にある大阪大学のロシア語学科学生たちも市の広報を見たり、大学に置かれたチラシを見たりして 10 名近くが参加しました。参加者には、ロシア領事館に入るのは初めてという人も多く、交流会は格好のロシア紹介の場となりました。

ジェーアイシー旅行センターは後援団体の一員として交流会の開催に一役買わせていただきました。またこのような機会があれば、是非、協力したいと思います。(伏田昌義)

J I C ロシアセミナー

プーチン政権とロシアの行方

講師;佐藤親賢氏(共同通信社・前モスクワ支局長)

日時;11 月 16 日(土)13:30~17:00

13:30-15:00 講演会

15:15-17:00 ロシア留学説明会・相談会

場所;新宿・スバルビル会議室(新宿西口)

(TEL; 03-3347-2496)

参加費;無料

主催;JIC国際親善交流センター

申込み;TEL 03-3355-7294 FAX 03-3355-7290

e-mail: jictokyo@jic-web.co.jp

JICでは秋恒例のロシアセミナー・ロシア留学説明会を 11 月 16 日に東京・新宿にて開催します。

今年の講師は、JICロシア語留学OBで、共同通信外信部・前モスクワ支局長の佐藤親賢氏。佐藤氏は、最近、岩波書店から「プーチンの思考〜『強いロシア』への選択」を出版されたばかり(12 ページ「本の紹介」を参照ください)。特派員生活 7 年の経験をもとに、生きたロシア政治のお話を聞かせていただきます。

講演会の後は、JICスタッフによる、ロシア語留学説明会、相談会を開催します。

希望者は、電話またはメールでお申込みください。

大阪日ロ協会(藤本和貴夫理事長)のウラジオストク訪問旅行(3月27日～30日)のお手伝いをさせていただきました。事務局次長の大原さんから訪問記をいただきましたので掲載します(編集部)。

Я люблю Владивосток. А Вы?

大阪日ロ協会結成 35 周年

ウラジオストク4日間の旅

大原 和生(大阪日ロ協会・事務局次長)

今回のロシア旅行は、小生にとって 3 回目。1 回目は 1986 年にモスクワとレーニングラードを訪ねました。丁度チェルノブイリ事故の時でした。まだソヴィエト時代で、びっくりしたことが沢山ありました。それから 20 数年経って、去年はサハリンへ行きました。ソヴィエトからロシアに変わってどうなったのか、興味がありました。それは、公務員から中小企業の社員になって世の中が違って見えるようになったということかなと、一人合点してきました。しかし、今回のウラジオストクの旅では、もっとドラスティックに変化しているロシアの姿が見えてきました。



昨年 9 月に APEC(アジア太平洋協力会議)がウラジオストクで開催されました。会議に向けて、莫大な資本が投入され、空港から市内に通じる鉄道や道路、金角湾にかかる大橋(斜張橋)など、インフラ整備が大きく進んでいました。ウラジオストクは、戦前には日本人数千人が暮らした日本に馴染みの深い町です。町の中には浦塩本願寺跡があり与謝



金角湾にかかる斜張橋

野晶子の歌碑もあります。大阪府が「沿海地方との相互交流協定」を結んでから 20 年余が経ち、今後さらに大阪とロシアとの交流が盛んになることが望まれるところです。

中小企業、自治体、医療、さまざまな交流の可能性

今回の訪問では、1) スモールビジネスの可能性、2) 先進県である鳥取や北海道、新潟などの実際の取組み、3) 沿海地方での医療事業の実態、4) APEC 後のインフラ整備の現状、その代表としての極東連邦大学の新校舎見学、などを視察の課題にして旅行を組み立ててもらいました。

最初に訪問したウラジオストク日本センターでは、大石荘平所長に、ウラジオに進出している日本企業の現況やロシア・ビジネスの課題などの話を伺いました。続いてウラジオストク鳥取県ビジネスサポートセンターでは、若くて美人のアンナさんに日本語でレクチャーを受け、鳥取県の取り組みを勉強しました。大阪では得られない情報も多く、日ロの物流が何故うまく進まないのか、大阪は何故ロシアと疎遠なのか、等々、いろいろ考えさせられました。

APEC 会議の施設を転用して、今年 9 月から極東連邦総合大学がルースキー島の新キャンパスに移転し、授業を開始することになっています。英語教育に重点がおかれ世界に向けて発信する 45000 人規模の巨大な大学です。見学許可をとるのに最後まで難渋しましたが、藤本和貴夫理事長の奔走で無事見学することができました。放射線医学の分野では、重粒子線加速装置が導入されるらしいと聞きました。大阪府も同種の装置を持っており、医療分野での交流にも今後取り組みたいところです。

百聞は一見に如かず

今回、ウラジオストクで過ごしたのは 4 日間だけでしたが、「百聞は一見に如かず」の諺どおり、見て、歩いて、聞いて、驚くことばかりでした。インフラ整備がものすごい勢いで進んでいることもさることながら、コンビニのような店や商店も活気があり(雰囲気はまるで大阪)、かつての軍事都市の面影は

薄らぎ、港を見下ろす展望台やシベリア鉄道の起点であるウラジオストク駅、古い城砦跡など、観光に事欠かないところだと思いました。

3 月とはいえまだ寒いだろうと万全の冬装備で出かけたのですが、残念ながら雪は積もっていませんでした(天気に恵まれよかった！)。しかし、もっと驚いたのは、ロシア人通訳のイリヤさん。防寒着の下はなんと T シャツ。ホントにびっくりしました。

今回の旅行で興味を持っていたことのひとつはロシア料理です。私がロシア料理を食したのは、2 回のロシア旅行中と大阪総領事館でのパーティーなどごくわずか。日本には、



鳥取県ビジネスサポートセンターにて

フランス料理、イタリア料理、中華料理、韓国料理、インド料理など、たくさんのレストランがありますが、ロシア料理は「食べログ」で検索したら大阪でわずか 7 店。とても少なく、残念な気がします。

最近はロシアでも日本食が普及しており、ヘルシーさを好む人たちに人気があるようです。今回は、街中の店に行く機会が無かったので、アメリカのように巻き寿司は裏巻き(カリフォルニアロールやビーフロール)、マヨネーズ使用なのかな、などと思いながらスーパーを覗いてみました。驚いたのは、日本のスーパーにあるものなら何でもありそうなほどの品揃え。衣料、文具、食料品、酒、菓子、魚介類、肉、野菜、果物、惣菜類(漬物、キムチ、サラダ、フライなど)と、豊富に並んでいました。値段は日本より少し高いか、ほぼ同じ。ビールも大いに普及し、イカの加工品、干し魚、ニシンのマリネや酢漬、燻製の鮭に缶詰・瓶詰など酒のあてには事欠かないし、インスタント食品もたくさん種類があり、安く売られていました。ただし、夜には酒類の販売は禁止だそうです。が、知らない者の特権で買ってしまいました(すみません)。とくに気にいったのは、ニシンのマリネ、ロシアのピーナツ、イカの燻製など。もちろん、ウォッカもワインもビールも、美味しくいただいた旅でした。

企画・準備を担当していただいた JIC の皆さまに感謝します。

《ジーマの町を歩けば》

ドミトリー・トカチェンコ (タリン大学・院生)

クナイパへ ようこそ！

クナイパ...？ これはドイツ語の Kneipe (居酒屋) kneipen (愛飲する) という言葉から派生したポーランド語、ウクライナ語です。イギリスのパブ、イランのチャイハネ、イタリアのカフェに似た雰囲気ですが、クナイパの主な飲み物は歴史的にビールでした。

クナイペ (Kneipe) はドイツからポーランドに行きクナイパ (knaipa) となりました。リボフをはじめとする西ウクライナは、その昔、ポーランドの一部だったため、この地域が 1939 年にソ連に編入されると同時にクナイパはウクライナにも入りました。

1991 年にソ連が崩壊しウクライナは独立国となりましたが、昔の時代のノスタルジアで、クナイパ (ウクライナ語: кнайпа) の文化が少しずつ復活しはじめました。もとはポーランドだった西ウクライナと西ベラルーシ、ドイツの一部だったロシアのカリニングラード州では、クナイパという言葉が生き残っています。

ただし、最近では「ビールが飲める居酒屋」というよりは、「友達と会って、落ち着いて話ができる場所」という方が、クナイパの意味に近いようです。ヴィキペディアに「井戸端」という部門がありますが、ウクライナ語では「クナイパ」となっています。



「クピドン」の入口

キエフのクナイパ「クピドン」

数年前、キエフの町を歩いていて、どこかでコーヒーを飲みたいと思った時、偶然「わがクナイパへ ようこそ！」という看板を見つけました。古びた電灯と地下に続く階段の先に、そのクナイパがありました。店の名前は「クピドン〜ウクライナのインテリアの最後の宿」。

「クピドン」はウクライナ語で「キューピッド」の意味ですが、ここには一体何があるのでしょうか？ 階段をおりると、まず本棚が目に入りました。本屋さんかなと思って右に曲がると、喫茶店みたいな雰囲気です。壁には 20 世紀初めのポスターや古本、玩具やアクセサリが飾ってあります。天井にシャンデリア。外は暑いけど、クナイパの中は涼しくて気持ちよかったです。

クナイパには、もちろんビールもメニューにあります。食事や飲物は何でも良くて、一番大事なのは会話できる雰囲気ですね。クナイパでは、実際に友達と会って話をするだけでなく、ノート・パソコンを持ち込んで仕事をしたり、スカイプで遠くの友達と話したりすることも多いのです。ウクライナのクナイパは、現代的なサブカルチャーになっています。本＋デザイン＋ビール＋コーヒー＋WiFi の好きな人がクナイパに集まりそうです。

クピドンではさらに、音楽の生演奏やウクライナの作家の本のプレゼンテーション、映画のデモンストレーションなども行われていました。店の入口に「ブキニスト」という古本屋さんが併設されているのでウクライナの古本も買えます。



落ち着いた店内(クピドン)

数年前のことを思い出して、クピドンは今どうなっているのだろうかと思い調べてみました。キエフのメインストリートであるフレンチャーチク通りの真ん中あたりから少し入ったプロリズナー通りとプーシキンシカ通りの角にある建物の地下 1 階、相変わらず「ウクライナのインテリの最後の宿」がありました。一度友達を誘って、一緒にビールかコーヒーでも飲みながら、いろいろな話をしてみませんか。

クナイパ「クピドン」(Кнайпа “Купідон”)

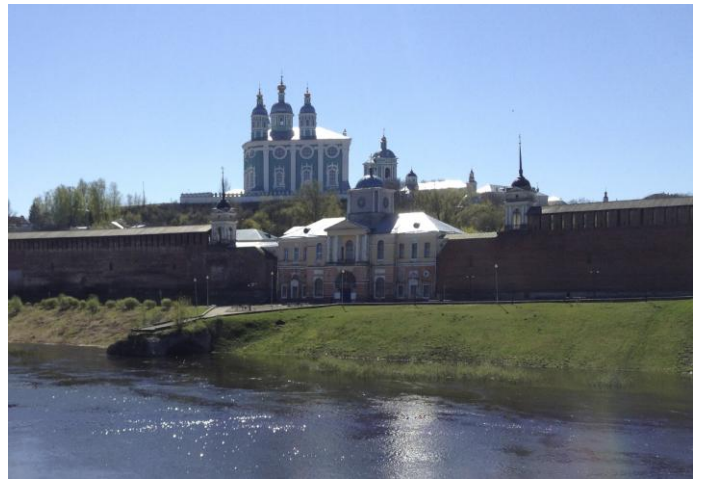
キエフ市プーシキンシカ通り 1-3/5 (Київ, Пушкінська, 1-3/5) 営業時間; 毎日 10:00~22:00

<http://www.kupidon.ho-de.kiev.ua>

スモレンスクの フォーク・フェスティバル

5 月の初めに、スモレンスクのフォーク・フェスティバルに行ってきました。

スモレンスク市(Смоленск)は西ロシアの古都です。モスクワから西へ約 360 キロ、モスクワとベラルーシの首都・ミンスクのちょうど中間に位置します。ドニエプル川に沿って建つ赤いクレムリンの城壁と美しい青と白のウスペンスキー寺



院がスモレンスクの一番有名な景色です。

ご存知の通りクレムリンは城塞の意味で、一番有名なのはモスクワのクレムリンですが、ロシア各地の古い町にもクレムリンやその旧跡があります。スモレンスクはその中のひとつです。

スモレンスクは西ヨーロッパからモスクワへの通り道にあたるため、歴史上ロシアに侵攻する外敵は必ずここを通り、スモレンスク周辺は度々戦場になりました。17 世紀初めのロシア・ポーランド戦争もそうですし、19 世紀のナポレオン戦争もそうでした。そして、第二次世界大戦中の 1941 年夏にドイツが開始したソ連侵攻(電撃作戦)でも激戦が行われました。ソ連軍の抵抗によってスモレンスクの戦いが 2 ヶ月間もかかったことが、ドイツ軍の電撃戦の障害となりました。その意味で、スモレンスクはモスクワの守り手と目されてきました。

スモレンスクで一番有名で美しい寺院はウスペンスキー寺院です。17 世紀末に建設された寺院の中にはスモレンスク聖母のイコンが安置されていました(第二次大戦中に行方不明)。ナポレオンは寺院の美しさに感動して、入口に衛兵を置いたと伝えられています。

フォーク・フェスティバル「心にロシアを」

さて、私たちが参加したのは「心にロシアを」という名のフェスティバルです。いろいろな国に住むロシア人のフォークアンサンブルがスモレンスクに集って演奏しました。フェスティバルの費用を負担したのはロシア政府でした。今回の参加者は、フィンランド、エストニア、ラトビア、モルドバ、ウクライナ、ベラルーシ、カザフスタンから集まりました。

フェスティバルは 5 月 5 日から 10 日まで行われました。私たちのアンサンブルは 13 人の歌手と 11 人の演奏者で構成されていました。初日にスモレンスクのフィルハーモニアで記者会見とオーディションが行われ、次の 7 日と 8 日には各アンサンブルがスモレンスク州のあちこちの町に行き、ソロ・コンサートを行いました。私たちは、7 日にロスラブリ(Рославль)、8 日はベリジ(Велиж)という町の文化会館で演奏しました。両方ともとても小さな町で、ベリジのコンサートのポスターは印刷でなく手書きだったのでびっくり



手書きのポスター

したのは、とても面白い経験になりました。世界各地に散らばっているロシア人の関係が強まれば、ロシアの文化はもっと発展すると思います。

* スモレンスクに行きたい方は、モスクワ(ベロルースキー駅)から夜行列車で、またペテルブルグ(ビテブスキー駅)やミンスクからも列車で行くことができます。

お伽のタラーシキノ宮殿

5 月にスモレンスクに行ったついでに、タラーシキノ博物館に足を伸ばしました。



その宮殿のような家がどこにあるのか、インターネットで調べてみました。そしたら、スモレンスクのすぐ近くにあることがわかり、絶対に行きたくなってしまいました。

タラーシキノ(Талашкино)は、スモレンスク市の南 20 キロぐらいのところにある村の名前です。タラーシキノ博物館を説明するためには、マリーヤ・チェーニシェバ(Мария

Тенишева)というロシア貴族の話から始めなければなりません。1858 年にペテルブルグで生まれた彼女は美術が大好きでした。ペテルブルグで芸術学校を作り、多くのロシア画家の水彩画やエナメル画を集め、ペテルブルグのロシア美術館に寄付しました。チェーニシェバはタラーシキノ村に別荘を持っており、そこに貧乏な農民の家族のための教育施設を作ろうと思いました。そして、仲間の貴族や当時のロシアの有名な画家たちをタラーシキノに招待しました。その中には、「遙かなる姫君」(トレチャコフ美術館収蔵)を描いたミハイル・ヴルーベリ(Михаил Врубель)、ニコライ・リョーリフ(Николай Рерих)、ロシアで初めてマトリョーシカのデザインを作ったセルゲイ・マリューチン(Сергей Малютин)などがあります。1890 年代から 1910 年代にかけて、タラーシキノはモスク郊外のアブラムツェボと同様、ロシアの芸術世界の中心の一つとなっていました。マリューチンは 1900 年から 3 年間、家族とともにタラーシキノに住んでいましたが、そのときロシアのモダニズム様式でお伽の宮殿を建てたのです。宮殿の名前は「チェレモーク」(теремок)。その全面にロシアの昔話のモチーフがほどこされ、まったくお伽話の世界にいるようです。現在は、チェレモークの中にはチェーニシェバが集めた美術品が展示されています。僕が一番印象を受けたのは、ヴルーベリがデザインしたバラライカ(ロシアの楽器)です。チェレモークの近くに、リョーリフのアイデアで作られた精霊教会があります。入口に飾られているモザイクの聖像(キリストのイコン)はリョーリフのデザインです(1914 年作)。十月革命の後、マリーヤ・チェーニシェバは外国に亡命し、1928 年にパリ郊外で亡くなりました。現在は、チェーニシェバの別荘は博物館となっており、スモレンスク州の一番美しい博物館のひとつに数えられています。また、スモレンスク市の中心部では、現在、チェーニシェバ名称教育センターが建設中です。チェーニシェバが始めた教育活動は将来にわたって続くことでしょう。スモレンスクに行くことがあれば、タラーシキノにも是非、立ち寄ってみてください。

しました。しかし、現地のお客さんたちは大歓迎で、とても手厚くもてなしてくれました。5 月 9 日はロシアの戦勝記念日で祝日です。この日、私たちはスモレンスク劇場の舞台でガラコンサートに参加しました。各アンサンブルが 2 曲ずつ演奏し、コンサート終了後は「友好の夕べ」(パーティ)がホテルで開かれました。ロシア以外のいろんな国に住んでいるロシア人と交流

しました。しかし、現地のお客さんたちは大歓迎で、とても手厚くもてなしてくれました。5 月 9 日はロシアの戦勝記念日で祝日です。この日、私たちはスモレンスク劇場の舞台でガラコンサートに参加しました。各アンサンブルが 2 曲ずつ演奏し、コンサート終了後は「友好の夕べ」(パーティ)がホテルで開かれました。ロシア以外のいろんな国に住んでいるロシア人と交流



した。しかし、現地のお客さんたちは大歓迎で、とても手厚くもてなしてくれました。5 月 9 日はロシアの戦勝記念日で祝日です。この日、私たちはスモレンスク劇場の舞台でガラコンサートに参加しました。各アンサンブルが 2 曲ずつ演奏し、コンサート終了後は「友好の夕べ」(パーティ)がホテルで開かれました。ロシア以外のいろんな国に住んでいるロシア人と交流

した。しかし、現地のお客さんたちは大歓迎で、とても手厚くもてなしてくれました。5 月 9 日はロシアの戦勝記念日で祝日です。この日、私たちはスモレンスク劇場の舞台でガラコンサートに参加しました。各アンサンブルが 2 曲ずつ演奏し、コンサート終了後は「友好の夕べ」(パーティ)がホテルで開かれました。ロシア以外のいろんな国に住んでいるロシア人と交流

した。しかし、現地のお客さんたちは大歓迎で、とても手厚くもてなしてくれました。5 月 9 日はロシアの戦勝記念日で祝日です。この日、私たちはスモレンスク劇場の舞台でガラコンサートに参加しました。各アンサンブルが 2 曲ずつ演奏し、コンサート終了後は「友好の夕べ」(パーティ)がホテルで開かれました。ロシア以外のいろんな国に住んでいるロシア人と交流

した。しかし、現地のお客さんたちは大歓迎で、とても手厚くもてなしてくれました。5 月 9 日はロシアの戦勝記念日で祝日です。この日、私たちはスモレンスク劇場の舞台でガラコンサートに参加しました。各アンサンブルが 2 曲ずつ演奏し、コンサート終了後は「友好の夕べ」(パーティ)がホテルで開かれました。ロシア以外のいろんな国に住んでいるロシア人と交流



した。しかし、現地のお客さんたちは大歓迎で、とても手厚くもてなしてくれました。5 月 9 日はロシアの戦勝記念日で祝日です。この日、私たちはスモレンスク劇場の舞台でガラコンサートに参加しました。各アンサンブルが 2 曲ずつ演奏し、コンサート終了後は「友好の夕べ」(パーティ)がホテルで開かれました。ロシア以外のいろんな国に住んでいるロシア人と交流

した。しかし、現地のお客さんたちは大歓迎で、とても手厚くもてなしてくれました。5 月 9 日はロシアの戦勝記念日で祝日です。この日、私たちはスモレンスク劇場の舞台でガラコンサートに参加しました。各アンサンブルが 2 曲ずつ演奏し、コンサート終了後は「友好の夕べ」(パーティ)がホテルで開かれました。ロシア以外のいろんな国に住んでいるロシア人と交流



キーロフ十字架行進 (4)

ベリカロツコエ村での 1 日

伏田 昌義

ベリカロツコエ村に着いて、ジーマ氏の知人宅に荷物をおろし、ほっと一息ついたのは夕方 7 時頃か。ジーマ氏の知人は私たちに家を明け渡して、娘の家で 2 日間過ごすという。ありがたいが、申し訳なくもある。自分の家を友人とその知り合いに丸々明け渡すという「人間関係」は、ロシアならではの、日本人の感覚からすると濃密すぎてちょっと戸惑ってしまう。ジーマ氏は「友達とはお互い貸したり、借りたりの関係」とこともなく言う。考えてみれば、このキーロフ行進の初日から私たちはジーマ氏の友人宅で宿泊の世話になっている。ジーマ氏からすれば、リュドミラさんは親しい友人かもしれないが、その友人である私やセルゲイ氏、ユーリー先生は友人でも何でもないはずなのだが、そんな分け隔ては全くない。

人の世話になったらそれ相応の礼をするというのは、日本人でもロシア人でも変わらぬ礼儀感覚だが、とかくお金や物に置き換えようとする日本人に比べて、自分の行動によって気持ちを表わすロシア人の生活感覚は日本人よりずっと人間臭く感じられる。

出発時は 3 万 5000 人、歩いて到着したのは 2 万 5000 人

「バーニャ(ロシア式サウナ)があるから、火を焚いて交代で入ろう」、ジーマ氏が提案すると歓声が上がった。夜行列車に乗った日からもう丸 4 日シャワーを浴びていない。ロシアは湿気が少ないので汗をかいてもすぐ乾いてしまうとはいえ、さすがに気持ち悪い。着替えの洗濯もしたい。ジーマ氏は息子のイリヤ君にバーニャ係りを言い付けた。

バーニャの準備ができるまでの間、少し村の中を探検してみようと外に出ると、入口につないである大柄の雌犬がじやれて飛びついてくる。ちょっといかつい顔つきだが性格はいたって人懐っこい。頭を撫で、首筋、わき腹をさすっていると喜んですぐ横に転がる。子育てがすんだあとなのか、途中で子犬と引き離されたのか、まだふくらみのある乳が垂れてだらしない。密かに「ワン子」と名付けて、入口を通る度に相手してやると、顔を見るなり体当たりするように飛んできた。犬はロシアも日本も変わらない。

6 月初旬、一年で一番日が長いこの時期、夕方 7 時といっても太陽はまだ高いところにあり、外は十分に明るい。この日は午後からずっと快晴、気持ちのいい天気が続いている。ベリカロツコエの村は、教会に続く広い道の両側に細い道がいくつも合流し、その細道の両側に家が点在しつつ広がっている。どの家も柱と板壁を組み合わせで建てた小屋といった風情で、それほど立派な造りではないが、それぞれ庭があり、家の周囲には小さな菜園がある。薪の材料にするのだろうか、板切れや細い丸木を山のように庭に積み上げている家もある。本道を外れて 5 分も歩くと、もうそこにはどこまでも広がるロシアの大地が横たわっている。人間の存在は、このロシアの大地のなかでは圧倒的に小さく見える。

教会の周囲は十字架行進の参加者たちのテントで埋め尽くされている。今日は天気がいいから野外生活も快適に違いないが夜は冷え込むかもしれない。同行のジーマ君によれば、キーロフ市をスタートした時点で参加者は 3 万 5000 人、この日ベリカロツコエ村に歩いて到着したのは約 2 万



5000 人。1 万人は、初日だけの参加か途中でリタイアしたらしい。しかし、ベリカロツコエ村で行われる聖水の儀式に参加するのが行進の大きな目的なので、歩けない人や時間のない人は、儀式に参加するためだけに遠方から車でこの村にやって来る。したがって、この日のベリカロツコエ村の人口は、やはり 3 万人以上に膨らんでいるはずだ。道端には、遠くロストフ・ナ・ドウやモスクワから来た車やバスがあちこちに停められている。キーロフ市とベリカロツコエ村を結ぶ臨時シャトルバスも運行されており、「満席になり次第出発」と表示が出ている。

バーニャ、バーニャ

バーニャは、家の庭を挟んだ小さな小屋の中にしつらえてあった。小屋はほぼ半分に仕切られ、入口近くの端っこに小さな椅子とテーブル代わりの板が置いてある。ここが脱衣コーナーらしい。その奥には薪が山のように積み上げられている。入口の左奥に小さなドアがあり、そのむこうがバーニャになっている。

身をかがめて小さなドアをくぐると、簀子のような板を敷き



つめた土間の中央にドラム缶大の円筒形のストーブで火が燃え盛っている。ストーブの下半分が炉、上半分は水を入れるタンクだ。ストーブに薪を放り込んで盛大に燃やして部屋全体の空気を暖めると同時に上のタンクで熱湯を沸かすようになっている。

都市部で目にする本格的なバーニャはストーブの焚口が外部にあり、危険防止のためストーブの周りを石や木で嚴重に囲い、室内には 2 段か 3 段の木の床がしつらえてある。熱く焼けたストーブに柄杓で水を振りかけると瞬間的に蒸発して、蒸気が部屋全体に充満する。ロシアのバーニャは、日本で一般的なフィンランドサウナ (乾燥した高温サウナ = 100~120 度) と違って、蒸気サウナだ。温度は 60-80 度程度と低い湿度は 80-90% と高い、文字通りの蒸し風呂だ。バーニャの中ではヴェーニクと呼ばれる葉のついた白樺や樅の木を水に浸して、体を叩きあつて刺激する。葉についた水滴が蒸気となり木の葉の香りと相まって体を包む。血行が良くなり健康に良いと言われている。十分に温まったら小さなプールに飛び込んで体を冷やす。冬だと外に出て裸で雪のなかを転げまわることもある。これを何回か繰り返して楽しむのが一般的だ。バーニャの隣にはもちろん体を洗うコーナーがあり、洗濯室やマッサージ室、軽く食事ができるラウンジなどを備えた豪華なバーニャもある。

しかし、ここは人口数百人の小さな村。そんな立派なバーニャがあるはずもない。むき出しのストーブが部屋の真ん中にデンと鎮座し、周囲の壁際にベンチが置いてあるだけの簡素な造りだ。プールも洗濯室もない。ストーブをガンガン焚いて部屋を暖めたら、壁際の水道からバケツに水を汲み、柄杓で熱く焼けたストーブに水を少しかけて蒸気を充満さ

せる。いい加減汗をかいたら、バケツの水に熱湯を足してほどよい湯加減にし、体を洗う。ついでに衣類の洗濯もする。生憎、この日は火力が弱く、部屋が十分に温まらないうちに入浴したので、少し物足りなかったが、それでも体をしっかり洗い、一息つくことができた。

余談ながら、通常、バーニャの中にはインドのサリーのような長い布を体に巻きつけて入るが、ここでは小さな手拭一枚、日本の銭湯でおなじみの入浴スタイルだった。男同士、女同士の友人でバーニャを楽しむ場合もあれば、家族で混浴することもある。日本を訪れるロシア人は温泉が大好きで、東京・お台場の大江戸温泉物語や箱根のユネッサンは人気の観光スポットなのだが、一般に他人同士が裸で入浴する日本の風習に抵抗感を示す欧米人に比べて、ロシア人がすなりと温泉風呂を受け入れて、むしろ大はしゃぎで楽しむのは、こんなロシアのバーニャの伝統があるからに違いない。

4日目 6月6日 ペリカレツコエ村

キーロフ行進のなかで、もっとも重要な「聖水の儀式」が行われる日。天が敬意を表したのか、この日は終日快晴の好天気だった。空が抜けるように青い。

信心深いジーマ氏一家、カーチャさん、リュドミラさん、ユーリー・セルゲービッチ先生らは、聖水の儀式に参加するために、早朝からヴェリカヤ川畔に出かけて行った。そこまで信心深くないセルゲイ氏とジーマ君、そして私の 3 人は朝寝をして、ゆっくりと出かけることにした。10 時ごろにジーマ氏一行と合流し、川畔で昼食をとり、午後一杯、「ヴェリカヤ川の休日」を楽しんだ。

断食

宿舎から教会までは 5 分とかからないが、教会から聖水の儀式が行われている川の畔までは 2 キロほど離れている。教会からヴェリカヤ川に向かう道の両側には、土産物やお



茶、アイスクリーム、パン、シヤシリク (串焼き) などの屋台が数多く並んでいる。聖水の儀式が終われば断食も終わり、肉類を口にしても大丈夫

夫なのだとジーマ君が解説してくれる。

ジーマ君によれば、ロシア正教には、いくつかの断食の決まりがあるそうだ。一般的なのは、マースレニツァ (масленица / 春を迎える祭) の翌日からパスハ (復活祭)

までの40日間の断食。そのほかにも正教の祭りや聖人の日にちなんだ断食がある。断食とはいえ、すべての食事を断つのではなく、肉、魚、卵、乳製品を断ち、野菜中心の食事をするのが一般的だ。断食の内容は、人によってまちまちで、肉だけ断つ場合もあれば動物性タンパクすべてを断つ場合もある。チーズなど乳製品や魚介類は含める人もいれば、含めない人もいるということだ。1年のうちで、どの期間に、どのような断食を行うか(あるいは行わないか)は、各人の信仰の度合いによって違っている。

断食の期間中は、食べ物に制限を加えるだけでなく、毎日お祈りをして、酒や遊びを控える。精神を平穏に保ち、敬虔な信仰心を取り戻す期間でもあるわけだ。

キーロフ行進の期間中も、熱心な信者はそれぞれに断食を行うのだそうだ。そういえば、キーロフに向かう列車の中でリュドミラさんはセルゲイ氏に取り出したサラミソーセージを口にできなかった。彼女が買ってきてくれたピロシキも野菜、魚、果物のピロシキだったことを思い出す。

ヴェリカヤ川の聖水の儀式が終わると晴れて断食が明けるので、その意味でも今日はお祭りなのだ。

キーロフからこの村まで歩くことだけが目的なのではなく、ロシア正教の信者にとっては、参加に向けた準備から行進期間中の生活、心の持ちようなど、すべて含めて信仰活動としてのキーロフ行進なのだということに初めて思い至る。

聖水の儀式

ヴェリカヤ川での聖水の儀式は、朝から何回も繰り返し行われる。聖水の儀式とは、ヨルダン川での洗礼からキリストの布教が始まったことにちなみ、「聖なる水」に体を浸して罪を洗い清め、新しい生命を与えられるあかしとする正教の儀式だ。「聖水」は普通の水ではなく、主教や司祭によって聖化された特別の水とされる。

ヴェリカヤ川の畔には大きな広場があり、その端に教会風の建物が建っていた。空け放たれた扉の中では聖歌が歌われ、神父たちの朗々たる祈り声が響き渡る。建物の前から川にむかって人々が列をなし、一種の参道を作っている。列の周りをさらに人々が埋めつくし、広場の外へとあふれだしている。人々は、ときどき胸の前で十字を切りながら、神父の祈り声に唱和している。長い祈りのあとにクライマックスが訪れる。神父に導かれた人々は建物からベルカヤ川に向かい、岸から川に入って身を清めるのだ。ここではベルカヤ川の水が聖なる水なのだ。

すべての人が沐浴するわけではないので、数人の神父がバケツに聖水を入れ、ハケを浸して沿道の人々に振りかける。人々は手を挙げて水しぶきを受けようと神父の周りに群がる。十字架を先頭に数人の神父たちが聖水を振りかけつつ建物までゆっくりと行進してもどり、一連の儀式が終わる。

断食を含めた一定の潔斎期間を過ごし、苦行をともなう行進を行い、そして聖水の儀式によって、罪穢れを洗い流し、心身に新しい生命を吹き込むことが、キーロフ十字架行進の目的であり、信仰的意義なのだ。

インタビュー

ジーマ氏一家やリュドミラさんたちは、すでに儀式を終え、広場の端の草むらに場所をとってくつろいでいた。私たちも合流して日光浴に加わった。

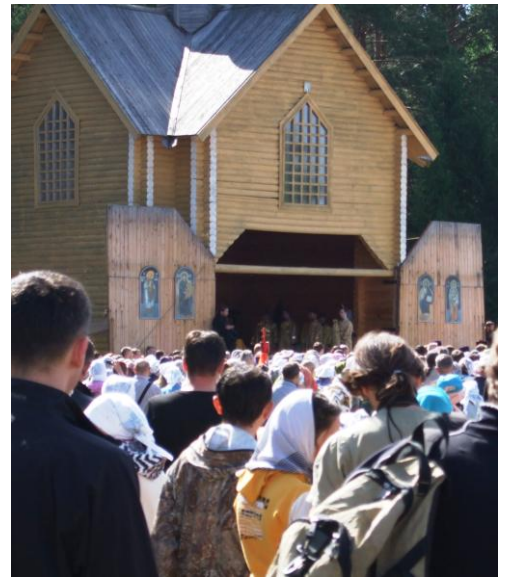
昼前に、大きなカメラを持った男性とちょっと美人の若い女性がやってきた。地元の新聞記者でインタビューしたいと言う。はるばる日本から、ロシア正教の信者でもないのにキーロフ十字架行進に参加したのは何故なのか、3日間歩いてみてどう感じたか、日本にはこのような巡礼はあるか、……、等々。矢継ぎ早の質問が飛んでくる。スベトラナさん(ジーマ氏の奥さん)が勤める雑誌社は、キーロフ市内で16万の発行部数をもつタブロイド紙も出しており、彼女が同僚に取材ネタを提供したらしい。

「十字架行進に参加して一番驚いたのは、幼い子供や老人が多数参加していること。わずか2〜3歳の幼児を抱いた母親や、自分の体重よりも重そうなリュックを担いだ老婆、泥濘の道を裸足で歩く女性などの姿が忘れられない。日本の四国遍路ではまず見られない光景だ。あらゆる年齢層の参加者が、過酷な条件に耐えて歩き続けている。これはやはり、『信仰の力』としか説明できないのではあるまいか。」

「キーロフ行進に比べれば、日本の四国遍路ははるかに整備され、観光化されている。バスや車で周遊する人々の行動はすでに観光旅行とほとんど区別がつかなくなっているが、かなりの困難が伴う歩き遍路においても、遍路道がよく整備されている分だけ観光化の傾向は否めない。弘法大師の修行のあとをたどった昔の遍路は別として、荒々しい自然の中で神との対話を繰り返しつつ歩く巡礼の意味は、キーロフ行進においてははるかに強く感じられる。」

「長時間歩くことには慣れているが、ロシアの行進の方が過酷だと思う。ロシアと日本の違い、自然の厳しさ、人間の逞しさなどを感じながら歩いた。」

「万物に神が宿ると考える日本人にとっては、『唯一の神』というものを理解するのは難しいが、東日本大震災を経験し



て、自然の巨大な力の前では人間の力はきわめて小さなものにすぎないということを身に沁みて知った。人間は大自然を構成する一部分として、自然にさからわずに謙虚に生きるすべを学ばなければならないというのが日本の伝統的な価値観だったのに、日本人はそのことを忘れかけていたのだと思う。歩くことは、いろいろなことを考えさせてくれる。復路もこのままキーロフまで歩くつもりでいる。」

といったようなことを答えた。

カメラマン氏によれば、キーロフ行進が再開されたばかりの頃はもっと野生的で、まさに「道なき道を歩く」困難なものだったが、道路や休憩場所が整備されてきた最近では、ロシアでもやはり「観光化」の傾向がでてきているとのこと。参加者が多くなればなるほど、行進を円滑かつ安全に進めるための管理と組織化が必要になる。イベント化、観光化の要素も強まらざるを得ない。相反する要素を持ちつつも、信仰活動と観光・イベント的要素は、どこかで折り合いを付け、補完し合う関係を結んでいくことになるのだろう。

キーロフ市内にもどってから渡された新聞(6月8日付)には、無精髭をはやした大きな顔が、2ページ見開きの記事とともに載っていた。ちょっと恥ずかしい。

再び「聖水の儀式」

昼食は、広場の端に敷いたシートの上に食べ物を並べて、ピクニック気分。パン、紅茶、野菜(トマト、キュウリ、ラディッシュ、ネギ、香り草、ニンニクの葉)、サーラ(豚の脂身)、チーズ、ハム、ブリヌイ(クレープ風薄焼きパンケーキ)などなど、ごちそうが一杯だ。

新たにジーマ夫妻の娘(マリーナさん。なんとジーマ夫妻にはイリヤ君とニキータ君の上にもう一人18歳の娘さんがいたのだ)やスベトラナさんのお母さんとその家族が加わり、一層賑やかになった。

昼食が終わった頃を見計らって、再び記者が今度はテレビカメラマンを連れて現れた。どうも「絵になるショット」を撮りたい様子。

「ここまで来たのだから、(信仰とは関係なく)是非とも、ベルカヤ川に入りましょう！」

「ここで聖水の儀式を体験しないのはもったいない！」

テレビカメラの前で貧弱な体を晒すのは気がひけたが、ジーマ氏もユーリー・セルゲービッチ先生も、服を脱いで「さあ行こう」と手を引っ張る。

「こうなったら全部体験してみるしかない」

促がされるままに服を脱ぎ捨て、パンツ1枚で茶色に濁った水の中に飛び込んだ。少し冷たいが、天気が良いので気にならない。水深は腰の上、胸の下くらい。岸から5~6メートル離れたところで、体全体を頭の先まで3度水に没する。説明によれば、3回以上、体全体を水の中に沈めるのが正しいやり方なのだそう。ユーリー先生は十字を切りながら何度も



何度も頭を水に沈めている。イリヤ君は、悠々と川の中で泳ぎ続けている。イヤイヤをして逃げ回っていたニキータも意を決して川に飛び込んでくる。

こうして私も聖水の儀式らしきものを体験することになった。岸に上がると、皆がや

んやの歓声で迎えてくれる。ロシア人の感覚からすれば、この場合、信仰は関係ない。一緒に川に飛び込むことで、外国人であ

る私が多少ともロシア人に近づいた、心を開いたと感じることが彼らにとってはとても嬉しいことだったのだ。そうして、私もまた少しばかりロシア人に近づいたような気になって、嬉しかったものだ。

* * *

川の畔で丸一日過ごし、夕方5時ごろ宿舎にもどった。

キーロフに帰るスベトラナさんのお母さんたちに持って返ってもらうために、携行品のうち不要なものを集めて荷造りをする。同時に、キーロフから車で届けられた追加の食料品を部屋の真ん中に広げて、残りの2日間に必要なものを各自のリュックに取り分けた。荷物が少し減ったがまた増えた。

ピロシキ、トマト、スープなどで夕食をとり、この日もバーニャに入って気持ちのいい汗を流した。

スベトラナさんの家族たちは、ワゴン車に私たちの荷物を積み込んでキーロフに帰っていった。車で走れば2時間足らずでキーロフ市内にもどれる。それを私たちは明日から2日かけて再び歩くのだ。(つづく)

2012 年 3 月にプーチンがメドベージェフとのポスト交換によって首相から大統領に返り咲きました。「後期プーチン政権」の行方を巡って、多くの「プーチン本」が出版されていますが、今回はその中から 2 冊を紹介しします (編集部)

本の紹介

プーチンの思考～『強いロシア』への選択

佐藤親賢著、岩波書店 (定価: 2200 円 + 税)

1999 年 12 月 31 日の夜、まさに 21 世紀が幕を開けようとしているその時にエリツィン大統領が突然辞意を表明し、プーチン首相 (当時) を大統領代行に指名して始まったプーチン時代。本書は、プーチン大統領の 12 年間の統治を跡づけ、ロシアの最高指導者がどのような国家像を描いているのかをわかりやすく解説している。2003 年 12 月から 12 年 12 月まで、途中 1 年半の中断をはさんで約 7 年間、共同通信のモスクワ特派員 (08 年から支局長) を務めた著者は、現地での豊富な取材経験にもとづいて、現代ロシアの政治課題と今後の方向を分析している。

* * *

「これまで 12 年間のプーチンの達成は、ソ連崩壊後の混乱の中にあったロシアに秩序と安定を回復し、「ロシア連邦」の国家としての統一性を確立したこと、この安定を基礎とした経済成長を実現したことにある。病身のエリツィン大統領 (当時) から国家元首の地位を任されたプーチンが選んだ道は、共産主義でも欧米型民主主義でもない、「ロシア愛国主義」を国民統合のイデオロギーにした、中央集権国家の再興だった。」(本書「はじめに」より)。

しかしながら、11 年 12 月に行われたロシア下院選挙は、プーチン与党にとって散々な結果となった。与党「統一ロシア」は過半数の 225 議席をわずかに上回ったものの、改選前の 315 から議席を 77 も減らした。プーチンが党首を務め、現職大統領メドベージェフが比例代表名簿の第一位に登載された与党としては大敗といっている内容だった。さらに、選管委員が与党に投票する印を何枚もの用紙に書き込んで投票箱に入れる様子など、各地の投開票所で票の水増しをうかがわせるさまざまな映像がインターネットを通じて流された。モスクワでは、選挙の不正に抗議する街頭行動が頻発し、12 月 10 日にクレムリン近くで行われた抗議集会には 10 万人もの人々が集まり、2000 年にプーチンが大統領に就任して以来最大の反政権デモとなった。皮肉なことに、プーチンが実現した安定と経済成長によって生み出された中間層市民が自由の拡大を求め、プーチン長期政権に『ノー』の声を上げ始めたのである。

「ロシアはいま、「ポスト・ソ連崩壊後」ともいえるべき新しい時

代に入ろうとしている。国民の反発の中で 2012 年 3 月に大統領に復帰したプーチンは今後のロシアをどう舵取りしていくのか。プーチン復帰後のロシアはどう変わるのか。」これが本書の基本的な問題意識である。

* * *

二度の戦争体験 (第二次世界大戦・独ソ戦と米ソ冷戦) が、プーチンの考えや行動に決定的な影響を与えたと著者は言う。ことあるごとに「国家主権の保持」、「外部からの干渉は許さない」と強調するプーチンの思考と行動の原点は、「二度と外国の侵略をうけるようなことがあってはならない」という「祖国防衛」の信念なのである。プーチン大統領の一期目、二期目の治政が「強いロシア」の復活に置かれたことがよくわかる。プーチン政権の 12 年間のあとの 2 章から 4 章は、そのままロシアの現代政治史となっている。

メドベージェフとポストをチェンジして組んだタンデム体制 (2008 年～11 年) で、一時はリベラル層 (中間層) の取り込みからロシア社会の民主化、近代化を志向しながら、それに失敗し、再び『強権体制』に舞い戻ったかに見える 2012 年以降の「後期プーチン体制」が今後どうなっていくのか。読者の関心に答えて、「プーチン後」への動きを著者は最後にいくつか示唆している。

一つは、資源・エネルギー輸出に依存して成長を続けてきたロシア経済の近代化が進むかどうか。タンデム体制下でメドベージェフ大統領 (当時) が急激的な近代化の旗を掲げて、いわゆる「国策会社」の改革やロシア版シリコンバレーの創設に取り組んだが、経済改革は思うように進んではいない。資源依存の単調な経済構造から脱却し、技術革新を進めて、産業の高付加価値化、情報化、サービス化を実現することができるかどうか、プーチン後のロシアを占う最大の課題となるだろう。

二つ目は、この近代化の過程で生み出される中間層をプーチン与党が味方に取り込むことができるか、それとも敵にまわしてしまうかだ。近代化の推進には中間層の支持が不可欠だ。中間層は教育水準と収入が高く、まさに市場経済と近代化によって生み出された社会階層だ。プーチンがロシアの市場経済化を推し進めて来たことは間違いないのだが、同時に秩序と安定の回復を優先して政治的自由を封じ込めてきたことが、先の大統領選で大苦戦する事態をもたらした。経済成長と政治的自由とのバランスをいかにとるかが、今後の大きな判断材料となる。

三つ目は、強権的な政治手法につきものの官僚主義と汚職・腐敗体質。「連邦政府から配分される地方公共事業予算のうち何割かは『どこかに消えてしまう』のが通常だと言われている」。プーチン自身が「官僚主義と収賄はロシアの慢性病だ」と言い切るこの問題を解決していくことも近代化の大きな課題だ。

最後に、大都市と地方の格差をどう埋めていくか。モスクワ

だけが急成長をとげ富を蓄積する構造から、地方にも経済成長の恩恵が広範に行きわたるような仕組みをいかに作り上げていくか、中央集権と地方分権のバランスの取りようは、ロシアの政治、経済、社会構造全体に影響する大きなテーマだ。本書では示唆にとどまっているこれらの課題について、著者のさらなる分析が待たれるところである。(F)

ヴラジーミル・プーチン

現実主義者の対中・対日戦略

石郷岡 建著、東洋書店（定価：1900 円＋税）

2000 年に大統領に就任して以来、プーチンが「強い国家」「強いロシア」をめざして、ソ連崩壊以後混乱が続いていた国内の政治と経済を立て直し、石油価格高騰を追い風に高成長を実現して、ロシアを新興発展諸国 BRICS の一翼に押し上げたことは誰も認めるところである。「ロシアを救ったのは、自分だ」という強烈な自負心と使命感、そして国家のために働くという国家主義的道德観が、プーチンという人を強く特徴づけていると著者は言う。

しかしながら、2009 年のリーマン・ショックに端を発した世界経済危機はロシアの国家体制の脆弱性をさらけ出した。大統領に返り咲いたプーチンは、「長期低落傾向という支持率を抱え、さらに世界的な経済危機の波を受けながら、国家成長の源を、新しく探さねばならない」。

本書は、「後期プーチン政権」の国家戦略、とりわけ対外戦略を、現実のロシア経済を支える支柱となっている石油、天然ガスを軸として分析している。ロシア経済が資源・エネルギー輸出に依存して、社会経済のインフラ整備や高度産業技術の育成に立ち遅れていることが、その弱点としてしばしば指摘されるが、依然としてロシア経済を力強く支えているのは圧倒的な生産量と埋蔵量を誇る石油・天然ガスであることも厳然たる事実だ。現実主義者プーチンが、この現実を基礎に国家戦略を描かないはずがない。

本書の結論は、「あとがき」で著者自身の手で要約されている。

「ロシアはソ連時代の国力は持っておらず、もはや超大国という地位にはない。それよりも、隣国・中国の華々しい発展に、脅威を感じている。中国を中心とするアジア地域の経済成長は目覚ましく、21 世紀半ばには、アジアが世界の中心、もしくは繁栄の極になる可能性が強い。アジアと隣接するロシアは、アジアを無視することができない。……。プーチンが打ち出してきたのは、ロシア版「ルック・イースト」（東を向け）という国家戦略であり、現在は発展が遅れているシベリア・極東地域から東北アジアを通じて、アジアの発展の波に乗り、21 世紀の世界の流れに乗ることである。」

「そして、プーチンの東方戦略の行方に、大きな意味を持って姿を現しているのが、日本というアジア第二の経済大国である。プーチンの国家戦略を展開するうえで、日本は大きな役割を果たす可能性を秘める。何とかして。日本を利用したいというのが、プーチンの思いではないかと思う。」（本書「あとがき」より）。

* * *

日本とロシアの長年の懸案である「北方領土問題解決の方程式」（本書第 10 章）を見つけるためには、このようなプーチンの国家戦略をよく理解して対処しなければならないというのが著者の提言だ。

北方領土問題についてここで詳述する余裕はないが、イルクーツク会談（2001 年プーチン・森首脳会談）で、1956 年日ソ共同宣言に基づいて歯舞、色丹の引き渡し手続きを協議すると同時に、残る国後、択捉の帰属問題の話し合いを続ける「並行協議」が日本側から提案され、ほぼ合意に達していたにもかかわらず、その後の日本政府の方針転換（「四島一括返還」への回帰と日露交渉を推し進めた政治家と外交官のページ）によって領土交渉が暴力的に頓挫させられて以来、この 10 年間、日本側からこの問題を積極的に解決しようというイニシアティブはほとんど見られなかった。のみならず、「ロシアによる北方四島『不法占拠』」という、ロシア側が到底容認しえない、第二次大戦後の国際秩序を真っ向から否定する言動が日本側から度々発せられている。メドベージェフ大統領（当時）の国後島訪問は、この問題を解決しようとする気が全く無いかに見える日本の対応への苛立ちの表明だったのではないかと著者は指摘している。

にもかかわらず、ロシア側からはプーチン大統領の就任前の記者会見での発言のように、「相互に受け入れ可能な解決策」（ウィンウィン方式の解決策）を話し合おうという提案が繰り返し表明されている。「明らかに、ロシアは日本の行動を待っている。どう応えるのか、どう対処するのか。そして、東アジアの国家戦略をどう展開するのか、答える順番は日本にあると思う」という著者の結論は説得力がある。

* * *

書評子としては、社会主義計画経済の失敗とペレストロイカの挫折からエリツインの急進的市場化政策まで、ソ連崩壊前後の動きがコンパクトにまとめられている第 2 章「ソ連崩壊とロシア社会の変遷」と、2001 年同時多発テロから第二次イラク戦争、アフガニスタン戦争へと突き進んだアメリカの行動が、第二次大戦後の国際秩序を形骸化させ、国連を中心とする国際関係を攪乱していること、それを批判するプーチンの一貫した姿勢を分析した第 7 章「アメリカの一極世界は来なかった」が、ソ連崩壊後のロシアと今日の国際情勢をあとづけるうえで、たいへん参考になったことを付言しておきたい。(F)

エクメネの最果てへ

—サハ共和国 冬の旅—

【第15回】 岡本 健裕

お別れの刻は静かにやってくるのです。世界一寒い町ヴェルホヤンスクの3日間が、とうとう、終わります。

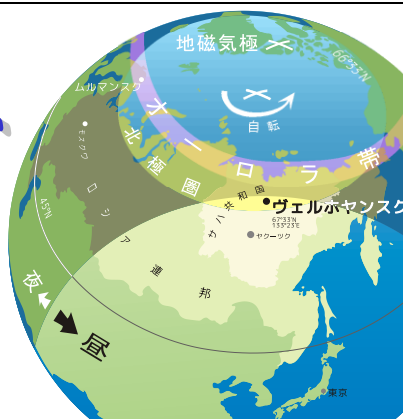
ちょっと脱線させてください。実は2泊3日で帰れるからこそ、私はヴェルホヤンスクを旅先に選んだのです。もちろん「帰れる」というのはヤクーツク起点での話ですけどね。(日本からだと、さらに3日くらいは最低でも必要になります。)

覚えておいででしょうか。人の定住している土地で世界一寒いと言われる場所は、少なくとも2つくらいあるんだ、というようなことを、連載初期に書きました。それはいずれもこのサハ共和国内にあります。一つはもちろん、ここヴェルホヤンスク町。もう一つ、北半球の寒極とされているのは、オイミヤコン村です。

今さら身も蓋もないことを言いますが、現代の日本において、世界一寒い定住地としての知名度は、オイミヤコンの方がヴェルホヤンスクよりも間違いなく上です。

おさらいしましょう。かつてヴェルホヤンスクでは、公式記録で -67.8°C という最低気温が観測されました。一方、オイミヤコンで出た気温は、実はこちらは非公式記録だったのですが、 -71.2°C ！センセーショナルです。やっぱり 60°C 台と 70°C 台のインパクトの差は大きい。もう、生身の人間が存在できるのかどうか疑わしくさえ思えてきます。これではオイミヤコンばかりが目立ってしまうのは仕方ありませんね。事実、この数年間だけでも、日本のいくつかのテレビ局がオイミヤコンへ取材クルーや芸能人を送りこみ、極限環境でのロケを敢行しているのです。ということは、もう何度も、公共の電波に乗せられて、日本全国へ、オイミヤコンの映像は、届けられてきたってことです。もちろん日本語の放送で。もはや、オイミヤコンはぶっちぎりの「寒極の花形」に祭り上げられています。

そんなオイミヤコンに私も興味がなかったわけではあります。むしろすっごく行きたかった。でも、今回は断念するしかなかったのです。最大の障害は、オイミヤコンの交通の便の悪さでした。というのもヤクーツクから陸路ではるばると、片道2日もかかるのです。往復すると最低でも5日くらいになります。しかも公共交通は通っていません。するとどんな旅になるでしょう。ヤクーツクから何日もずっと、専用車を借り上げ、ドライ

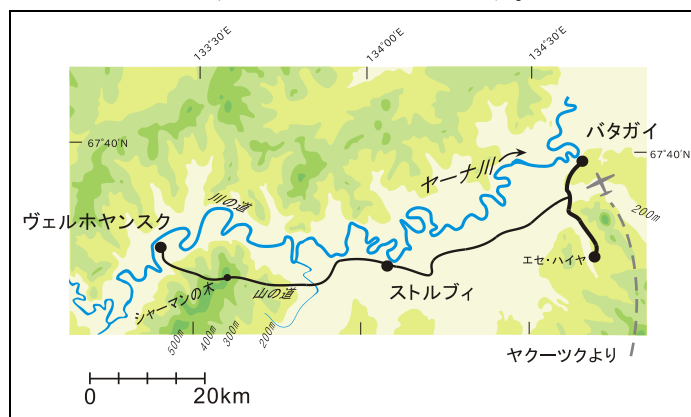


バーを雇い、それらサポート要員達の宿泊や食事代金を負担し…いやーととてもとても、無理無理。当時まだ駆け出しのサラリーマンだった私の経済力と、持てる休暇の範囲内で、そんな大名旅行、どうやって実現できるでしょうか。

でも、いろんな人を巻き込みまくり、力を借りまくっているうちに(※1)、どっちかというマイナーな方の寒極、ヴェルホヤンスクには手が届いたのです。よくよく調べれば、この町は色々と条件に恵まれていました。

まず、近くのバタガイ集落まで、3日に1往復くらいは飛行機が飛んでいるのありがたい。これだけタイトなスケジュールが可能になったのも、高速で移動できる飛行機のおかげです。それから、その飛行機が公共交通機関であるところがまたすばらしいのです。日本からヴェルホヤンスクの直前くらいまで、ずーっと、公共交通だけを乗り継いで来ることができるわけですから。これなら何日も専用車を借り上げるよりも、ずっと財布にやさしいですね(それでも、ヤクーツクーバタガイ間だけで往復5万円以上しましたが)。

長い脱線でしたが、要するに、ヴェルホヤンスク滞在を終えた私達は、昼14:50発の便に間に合うように、バタガイ空港を目指さねばならないのです。



バタガイ空港へ降り立ったのは2009年1月13日午前10:20。今日は1月15日ですから、およそ50時間強で引き返す計算です。この時、気づきました。決まった時間に発着する乗り物は、ずいぶんと精神面に大きな影響を与えるものだなと。

まず、その手の乗り物には、時刻表に合わせて行動しなければならないという強迫的な面があって、これは明らかなストレスとなります。しかし一方で、それに従うことにある種の幸福を感じるのもまた事実なのです。ストレスを喜ぶなどと言うと、いかにも倒錯したマゾヒズ

ムを告白するようで何だかドキドキしますが、ちょっと違って、その正体はおそらく、定期的に運行する乗り物の存在を意識するときに、世界とつながる接点や、社会の秩序と触れ合うよりどころを得る幸福感なのです。日本のように極めて交通の発達した社会にいと自覚しにくいのですが、私はもう、この心地よさに中毒的にハマっている気がします。だから、「日時を守ればバタガイから飛行機に乗れるようにこの世は造られていること」がうれしくてなりません。自分で書いてて思いますが、変態です。でもきっと、私だけじゃないと思うのです、こういう人は。

お世話になったホテル「寒極」で荷物をまとめていると、おととい、学校でオリンピック博物館を案内してくれたあのピョートル先生が私達を訪ねてみえました。別際にお土産を渡しに来てくださったのです。

いただいたものはまず、写真が2枚。博物館(連載第6回参照)での記念写真です。デジカメで撮った写真がわざわざきれいな専用紙に印刷してあります。確かにこの町の学校には、パソコン、インターネット回線、プロジェクター等の設備がひとつとおりあるのを目撃しましたし、皆、見事に習熟していましたから、これくらいの芸当は当たり前範囲内(連載第8回参照)でしょう。

しかし、続いての品にはおったまげました。それは3冊の本(※2、※3、※4)でしたが、どこに驚いたかって、それは次の2点です。

1. そのうち1冊はピョートル先生の自著であること。
2. 全ての本がバタガイの印刷所で出版されていること。



ピョートル先生の自著

全てのこのヴェルホヤンスク地区内で完結しているのです。もしかすると、流通までもが地区内で完了しているかもしれません。

これはソ連の遺産なのでしょうか。つまり、どんな僻地にも、均質で平等なソ連人的生活を提供するという、壮大な理想を全国で実践した結果、この地にも印刷所が設置され、専門職を育み、出版文化が根付くに至ったのでしょうか。でも変ですね、ソ連という国家は、出版に係るコンテンツの自由に対しては神聖なる弾圧者でしたから、道具と職人は揃っていても、このようにオリジ

ナリティーあふれる印刷物が、中央のコントロールによらないで純然にローカルな単位に生産される文化とは、全く相容れなかったはずなのです。

ハードは隅々に整備する一方、ソフトは厳しく制限する、こんな特殊すぎる社会が生み出したゆがみの昇華点の一つは、サミズダート(自主出版、あるいは地下出版)です。出版が自由でないからこそ、サミズダートを通じて逆に一般人は自ら表現者にもなりえたのです。これ、あながち無茶な説ではないと思いますよ。だって、今もらった本はサミズダートそのものですもの。「ソ連崩壊し、なおサミズダートを残す」—もしこれが一部なりとも真実を言い当てているならば、ソ連という国は何と遠



まわしなネタを仕込んでくれたのでしょうか。

そろそろ出発です。

でもここでまたしても、カルチャーショックを食らうのです。アナトリーさんのウアズ(ロシア製四輪駆動車)に乗った直後、オオノさんが言いました。「あ、ウサギ!」車内から後ろを振り返ると、男性が1人、小さなソリを押しながらこちらへ歩

いて来るのが見えます。本当だ、ウサギです。というかウサギの山。たった今、車に乗ったばかりですが、外に出てよく見せてもらうことにしましょう。

例の罟(連載第10回参照)にかかった獲物でしょう、真っ白で美しい、巨大なウサギたちがソリにたくさん積み上げて運ばれていきます。棒のように手足を伸ばして、皆さんお行儀よくカチコチに凍っているのか、モップの束のようにも見えます。

ニコライさん罟を見せてもらって以来、ずっと脳内に流れていた「待ちぼうけ」の歌がピタッと止まりました。

何なんですかこのウサギどもは。この極寒の地で、野生でこんなに立派な大きさにまでなれるくらいの優れた知恵と身体能力を持ちながら、どうしてあんな稚拙な罟にころりころりと引っ掛かっちゃうんですか。小一時間問い詰めてやりたくなりましたが、死んでるものは仕方ありません。

エクメネ(可住地域)の限界というものは、もっとわかりやすくその限界つぼさをさらけ出しているんだと思っていました。ちょっと外部との連絡が途絶えると、途端に住民の生活が行き詰りだすような、ギリギリな感じを想像していたんです。もちろんヴェルホヤンスクが

そんな町でないことは到着直後から十分に思い知らされていましたが、それでもやっぱり、このウサギたちの間抜けさには強烈にとどめをさされた感じです。要するにこの町は、厳冬期でさえ、かなりプリミティブな狩猟採集生活で、ある程度食いつなぐことが可能、ということなのですから。一体、これほどたくましい「町」(город) が他にどれくらいあるのでしょうか。

出版の件といい、このウサギのことといい、このヴェルホヤンスクを中心とする文化圏の自立っぷりは、半端ではありません。多くのものが自給できるのはすごいことです。そして、自給「できる」次元に留まらず、自給「する」のだという生き様は、より一層、すごい。そこには一片の依存心も見えません。豊かさの維持の仕方は心得ているという感じです。こういう社会って、無条件にかっこいいんだな。

しかし私は、あまりかっこよくないことに、さっきまで、この地域が定期便で外部とつながっていることに喜んでいたくせに、今度は独立の気概に感動しているのですから勝手なものです。

前回の連載の予告では、今ごろ凍ったヤーナ川の上にできた「川の道」をアナトリーさんのウアズで疾走しているはずでしたが、見通しが甘くて全く面目ありません。まだ出発すらしていないまま、紙面が尽きそうになってきました。あこがれてやってきたヴェルホヤンスク、後ろ髪引かれるヴェルホヤンスクから、次回こそは出発します。川の上へ！〈続く〉

※1 もちろん、この旅行が実現したのはサハ共和国、日本、双方に多くの方のご協力があり、新聞記者のオオノさんにも同行いただいたおかげであることを明記しておきます。

※2 Портнягин, П. В. (2008) *Воспитаники чурапчи нской спортивной школы -заслуженные тренеры СССР, России, Украины и РС(Я)*. Верхоянск РС(Я): ГУП «Верхоянская улусная типография»

著者のフルネームは Петр Васильевич Портнягин つまり、ピョートル先生ご自身。冊子のタイトルは『チュラブチンスキー体育学校の門弟たち-ソ連、ロシア、ウクライナおよびサハ共和国功労トレーナー』という大変長ったらしいもので、タイトル通りの猛烈にマニアックな内容です。そもそもチュラブチンスキー体育学校というのがサハ共和国内のチュラブチンスキー地区(ウールス)にあるらしいのですが、これはヤクーツクのすぐ東隣にある小さな(といっても面積は新潟県くらいある)ウールスなのです。ピョートル先生がなぜ遠く離れたこのヴェルホヤンスクで、このような冊子を執筆されたのか、もう何が何だかわかりませんでしたが、パラパラめくると合点がいきました。功労トレーナーの一人として、ピョートル先生も紹介されていたのです。何のことはない、ご自身含む歴代の同校出身トレーナー達の

華々しい活躍ぶりをまとめ上げた労作だったわけです。ふんだんにカラー写真を使った素晴らしいデータベースですがもちろん ISBN 等はなく、自費出版かつ非売品なのは間違いないでしょう。A4 判の冊子で、きれいなコート紙にカラー印刷された中綴じ 44 ページの装丁です。

※3 Миронов, В. Е. (2003) *Пути которые мы выбираем*. Багагай: ГУП «Верхоянская улусная типография»

本のタイトルは『私達の選ぼう道』。著者のフルネームは Виталий Егорович Миронов で、1952 年生まれのヤクート人です。タイトルはシンプルですが、中身は平坦な道ではなく、むしろとんでもない悪路ばかりです。1980 年代から、仲間とサハ共和国内を自転車、スキーなどで踏破するというエクストリーム旅行を繰り返してきた著者の、冒険に次ぐ冒険記です。冷戦期には外国に紹介されることもなかった、極めて情報の希薄な地域でのエピソードが満載で、すこぶるつきに面白そうです。それなのに私は、写真や挿絵を眺めながら拾い読みをした程度で、もったいないことをしています。すみません。

ISBN 等なし。装丁は A5 判の上質紙 126 ページ、ホチキス止めに表紙糊付け、表紙のみカラー印刷。背表紙は何も書かれていないところが、自主出版っぽさを増幅しています。

※4 Худяков, И. А. (2008) *Верхоянский сборник*. Багагай: ГУП «Верхоянская улусная типография»

本のタイトルは『ヴェルホヤンスク集』、著者のフルネームは Иван Александрович Худяков。原著は大変古く、1890 年イルクーツクで出版されており、これをヴェルホヤンスクの 370 年記念に当地で復刊したものです。ヴェルホヤンスク地方の民話や伝承、歌などが大量に収録されています。全てロシア語です。インターネットで探すと、原著は旧正書法で記述されている様子が見て取れますが(硬子音の語尾にいちいち Ъ がつくあれです。)、本書では全て現代ロシア語に記述が改められています。なんだかすごい資料のような気がしますが、この本もろくに読んでいません。ごめんなさい。

ISBN 等なし。装丁は A5 判の上質紙 207 ページ、ホチキス止めに表紙糊付け、全ページモノクロ印刷。表紙は初版の写しで旧正書法。背表紙はやはり、何も書かれていません。

◆◆編集後記◆◆

早くも 1 年の半分が過ぎ去りました。夏の旅行シーズン本番を迎え、スタッフ一同、大忙しの毎日を送っています。円安で訪日外国人旅行は好調、海外旅行はちょっと伸び悩みというのが一般的状況ですが、ロシア旅行は結構底堅いところがあります。いわゆる『コアな』方がロシアを訪れる傾向があるのでしょうか。その分「手ごわい」お客様でもあります。「ロシア専門」の看板に恥じぬよう頑張りたいと思います。向暑の時節、皆様お体大切に。(フ)